夜の出来事

長崎秋緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜の出来事

【Ｎコード】
Ｎ７６６５Ｄ

【作者名】
長崎秋緒

【あらすじ】
夜、実家からの電話がくる。母とのやりとりの中ぼくはこどもの頃のことを思い出す。

ようやくやり過ごした勧誘の電話にひと息つく間もなく、実家からの電話を知らせる着信音が鳴り、ぼくは、また夕飯にありつけそこなったかな、と冷凍食品のパスタを冷蔵庫へ戻し、受話器をとる。

母のうわずった声が聴こえてきた。さっきかけたんだけど、友達と話でもしてたの、と訊く母は、決まって会話の入りはそういう風に遠慮がちに、ぼくの身辺をひそかに探ろうとすることから始められる。ぼくは、神経が小刻みに刺激される思いにいらだち、無愛想な受け答えをしてしまった。

「どうしたの……、あの、ほら、仕事はどう、前に言ってた会社には入れたの？」

「しらん。それより何？なんかあったの？」

前職を辞めて半年が経とうとしていた。その間ひっきりなしの母からの電話で、ぼくはいやというほど再就職のことについて質問攻めにあい、そのつどけんか腰にはねつけては今日まできていた。またか、と気持ちも沈みがちになる。再就職の予定などなかったし、面接すら一度も受けずにいたのだから、当然今度も母には適当な嘘をついていた。その、あるはずもない会社の採用報告をぼくは待っていることになっていた。しらん、なんて言い草じゃ良くない結果だったと言っているようなものだな、と自分の演技の甘さが悔やまれる。どうしてこう半端なことしかできないのだろう。

「家でなんかあった？またあいつか」

「あの子がね、わたしを殴ったんよ。もう言っても聞かんようになった。お母さん、あの子が怖いわ」

「なんで殴られたの」

「知らんよ。ちょっと注意したらすぐ怒り出して、お父さんに頼んでも全然だめだもん。あんたいっぺんうちに帰って来てよ」

母はもう親子の気安さで遠慮なく、弟の近況を語り、ひとしきり

愚痴を吐き出し終えると、次に父の不甲斐無さを嘆き始めた。ぼくは弟がそんなふうになったことを、特別驚きはしなかった。むかしからその兆候を感じ取ってはいたから。ぼくという箍が外れて抑えるものがなくなり、ようやくすき放題やれるとふんだのだろう。今の弟を形成したのは間違いなく両親、とりわけ母の影響が大きかった。長男のぼくに対するそれとは違い、弟はひどく甘やかされて育てられていたように思う。大抵のことは弟が愚図るとすぐ通り、その影でぼくはずいぶん我慢を強いられていた。

今にしてみると、どこの家庭にもある、珍しくない家族構成ではあったけど、やはり弟をつけあがらせたのは、母の考えなしの愛情に原因があったと思う。弟が万引きで捕まり帰宅した際、母はひどく錯乱していたように思う。目を丸くさせ、俯いたまま何も言わない弟を、不思議そうに見つめるだけで、いっさい咎めることをしなかった。そんな時ぼくは日ごろの鬱憤を晴らすべく、いやそれだけの感情で動いたわけでもないのだけど、まるっきりの正義感からとも言い切れない、ぼくも多少戸惑っていたのかもしれないが、弟を兄弟げんか以外で初めて叩いた。平手で頬を弾くと、弟は予想外に従順にぼくの制裁を受け入れた。あの時弟も良心の呵責を感じてはいたのだろう。しかし、母は突然ぼくを叱り出した。叩くことはないとも言った。それはあんたの役目じゃないからと弟を庇う母にぼくは、こいつを甘やかし過ぎるといつかダメになる、と母の教育方法に意見した。熱弁だったと思う。ぼくの感情の昂ぶりとは反対に、母の対応は冷めたもので、こどもが親に意見するもんじゃない、と一蹴され、ぼくの考えは全てこどものへりくつで片付けられた。あの時母が本気になって弟を叱っていたなら、現在のような弟にはならなかったかもしれないのに、そう過去を思い返しぼくはしだいに言い難い腹立たしさを覚えてきた。なにをいまさら泣きついてきてんだよ。あの時真剣にこどもの言葉に耳を傾けることができる母親だったなら、きっとあの頃のぼくの家での虚無感に気づいてくれていたはずだ。あんた達は親として未熟だった自分を隠してぼくと弟

に接していた。だから本当の親子関係を築けなかったんだよ、お母さん……、ざまあみろ。

しばらく考え込むふりをして、そんなことを思い返していると無性に電話を切りたくなってきた。逃げ出したいのに、そこに縛られている自分を見つけてしまうと、ぼくの本性を探り当てた思いに、腹の底から湧き上がって来る怒りが母へと向かっているのをぼくは感じた。ぼそぼそと母の声が何か言っている。「……どう、帰って来られない？」

「ううん、今は無理。仕事のこともあるし、お父さんになんとかしてもらえば？」

「だって、あの人はダメよ。なんもしてくれんよ。あんたが帰ってきてくれたら……」

「……、そういわれてもなぁ、殴るって、そんなにひどいの？」

母は具体的には話さず、ただ、周辺をなぞるような、ひどく曖昧なことばかりを、自分の感情だけで話しているようにぼくには聞こえた。もしかすると、殴ったという表現さえ大げさなものなのかもしれない。母が未だに子離れ出来ていないのは薄々気づいてはいた。ぼくは母の身勝手な愛情に疲労させられてばかりの時間を過ごしてきた。過去を振り返ると理不尽なことの数々が母に由来するものだったことに思い当たるのだから。癇癪持ちの母の、気分の変わる一瞬がぼくの心に今も断ち切れぬ恐怖心を残している。それは母の、ぼくを独り立ちさせないための、重い鎖の拘束であり、現在も嫌々ながらも、母の愚痴に馬鹿正直に付き合っているのは、それを断ち切れていない証拠だと感じる。ぼくはつくづく自分の性格がうっとうしく思える。こんな両親との関係なんて捨ててしまえばいいものを、いつまでも微熱をおびたまま生活を続けていることはお互いに良くない。両親から逃げ出したくて一人暮らしを始めたのに、結果的には前よりも母親と話す時間が多くなってしまっていた。押し付けがましい親心などはいらないと心底思う。いや、親心ではない。それは擬似的なものだった。家族の内にいる時は気づけなかったが、

親元を離れてぼくは親の呪縛に精神を蝕まれている本当の自己というものを知った。ぼくが愛情だと思い込もうとしていた大半は偽者で、両親も必死になってその事実から目を逸らしていたことも、今になって理解できるようになった。こどもを産んだからといって親になれるわけではない。むしろその後から親としての成長が始まるわけで、父も母もその成長の為の努力を怠ってしまったのだ。親もどきとこどももどきの共生はどちらか一方にその皺寄せが行き、互いの力関係からみれば明らかに弱者であるぼくらこどもがその負荷を背負うことになるのだ。その絶え間なく流れ落ちてくる負荷をぼくはこどもながらに必死に絶えてきた。こどもの浅知恵でもってなんとかうまくやっているつもりでいた。けれど思い返せば、ぼくのがんばりに関係なく母は自分の気分しだいで癇癪を起こしていたように思う。ぼくは、こどもには到底できもしない役割を担おうとしていただけだったのだ。結果ぼくの精神は若くして枯渇しているかのように、本来あるべき外界への好奇心さえも持てず、こうして誰に相談するわけでもなく、一人空想の中で、世の出来事に結論を求めようとしている。いい加減虚しさも感じてはいるのだけど、どうしてもそれを手放すことが出来ずにいた。

母はまだなにか言っているが、ぼくは受話器から耳を離しざわめき程度に聴こえる母の声をひどく汚らしいもののように感じていた。薬の入った袋を片手に掴み、中身をテーブルの上に広げる。落ち着こう、と心の中でつぶやき錠剤をひとつ摘む。適当な相槌の合間を見計らって飲み込む。ぼくは水無しでも錠剤をうまく飲み込めるようになった。通院を始めてから薬を飲むという行為にも慣れた。そういえば、両親はなかなかぼくを病院へは連れて行ってくれなかったし、学校を休むことも許してはくれなかった。おかげでぼくは我慢強い人だと周囲には思われていたようだが、実際は満身創痍で通学していただけだった。一人暮らしを始めてから、自分がいかに無理をさせられていたかを思い知り、その時ぼくは目の覚める思いと同時に両親を心底恨むことができるようになった。こどもの頃の狭

い世界と親元を離れた今の世界では、その常識も価値観もまるっきり違っているようで、ぼくは世間からかけ離れ過ごしてきた自分をひどく恥ずかしく感じた。両親に教えられた常識は非常識で、さんざん否定されてきたぼくの言葉は、この世界ではまったく普通のことだと知らされた。ぼくの考えは間違えてはなかった。否定されてきたぼくの人格もこの世界では誰も疑おうともしない。自分だけ別の時代から来たような感覚はしばらくするとすぐに消え、ぼくは周りの人達と同じように生活をしていくことがうれしくなった。自分が一人の人間として扱われることの喜びはぼくに前向きな思考を与えてくれた。その頃のぼくは、程よく世間に馴染んでいたと思う。

しかし、何時からかぼくの精神は衰退へと向かい、気がつけば人の目さえまともに見ることができなくなってしまい、人との係わりが苦痛にさえ感じるようになっていた。あれはぼくの限界だったのだと思う。親元を離れたぼくの精神はその時点ですでに枯れる寸前だったのだ。それに気づかずぼくは知らずに無理を続けて、ついに精神を病むことになった。精神科に通院していることを両親は知らない。言っても無駄だろうという思いより、そのことで両親との対話の場をもたなければならない状況を考えると、ひどく気持ちが落ち込んでしまうのだ。唯でさえ疲れやすくなっているのに、両親との二対一の対話を円滑に進められるほどの精神力は今のぼくにはあるはずがない。何も解決しないが、この状況が今のぼくにとっては最良だということは判断がつく。今は心身を休めることが最優先なのだから。

「わかったから、もういい？風呂に入りたいから切るよ」

「あ、うん。あんたちゃんと掛け布団敷いて寝てる？布団もたまには干して……」

しつこく粘ろうとする母の言葉を強引に遮り電話を切る。そこだけとりあげると一般的な母親にみえてくるから不思議だ、と思いぼくはようやく効き始めてきた薬の作用でふらつきながら風呂場へと歩く。他人からみた母と実際に同じ時間を過ごしてきたぼくの知る

母とは印象がまるで違っていた。ぼくが母のことを周りの大人に話すと決まってみんな、「それはあんたの思い過ごしだよ。あんたのお母さんは優しい人だよ」とぼくを諭した。
その度にぼくは悪いのは自分なのだと罪悪感に悩まされるようになり、いつまで経っても周りの大人達のように母を感じることができない自分をひどく悪い子だと思い込んでいた。思えばぼくの周りの大人は、ぼくにとっては敵ばかりだった。味方など一人もいない状況であの頃のぼくは必死になって戦っていた。勝ち目などない負け戦だとも知らずにあがくぼくを大人たちはいったいどんな目で見ていたのだろう。急に涙がでてきた。ぼくは感情の波がひどくて、時々こんな風になってしまうことが多くなっていた。
狭い脱衣所で衣服をだらだらと脱ぎ、肌寒さにぼんやりとした感覚が醒めてしまいそうになる。頭からシャワーにうたれて、すべてを忘れようとする。シャワーの音が余計な考えをかき消してくれるようだ。膝を抱え込む格好で浴室にうずくまる。二の腕に噛み付きじわりと力を加えていく。もっと、と歯形よりも深いものを作りたい。皮膚より奥へと押し込むように力を込める。
浴室は妙に静かだと思った。温水の跳ねる音は遠くに聴こえ、ぼくはゆっくり二の腕から歯を離す。歯形がはっきりと見て取れる。傷口が痛みを覚える。滲んでくる血はすぐに流されていく。シャワーの流れは微かにピンク色をしている。またシャワーの音がうるさく感じられてきた。もう一度あの静けさを体感したくて、傷口に歯を合わせる。噛み切るくらいに力をいれよう、そう考えても一気にはやれない。臆病なぼくは少しずつ確かめるようなやり方で、顎に力を込め二の腕を噛む。
夜の浴室はしだいに音が遠ざかっていくようだ。首筋を伝う水の流れにもぼくの体は鈍い反応しか示さない。この静かな空間に何時までも閉じこもっていたいとぼくは思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7665d/

夜の出来事

2010年10月8日15時46分発行